第55回 メーデー万歳！

働くものの団結で 生活と権利・平和を守ろう

メーデー小史・世界と日本 怒りと世相を刻んで

起こり――労働時間短縮から

現在では一日八時間が一般的な労働時間になっていますが、十九世紀には十四時間、十六時間労働がめずらしくなく、ヨーロッパやアメリカでは労働時間の短縮を求めるストライキが頻繁に行なわれていました。

一八八六（明治十九）年五月一日、金米の労働者は八時間労働を要求してストライキに立ちあがり、シカゴを中心に三十五万人の労働者が参加、各地でデモ行進を行ないました。このストライキで多くの労働者が要求を実現できましたが、五月四日のヘイ・マーケット広場で行なわれた集会に爆弾が投げられ、警官が群衆に対し発砲し多数の死傷者を出したうえ、運動の指導者が処刑されてしまいました。（ヘイ・マーケット事件）

警察を使った弾圧で運動は一時後退しましたが、アメリカ労働総同盟は一八八八年の大会で、一八九〇年五月一日を期して八時間労働を実現させるために全力をあげることを決議、翌年の第二インターナショナルの結成大会で国際的統一行動を呼びかけました。

一八九〇年五月一日、アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア、ラテンアメリカなど各国の労働者は八時間労働を要求しストライキとデモに立ち上がりました。この年以来、五月一日には労働条件の改善や戦争反対などを掲げ、世界の労働者が団結を示威することになりました。

戦前――厳しい弾圧の中

日本で最初のメーデーは一九二〇（大正九）年五月二日の日曜日、東京の上野公園で五千人が参加して行なわれ、「八時間労働」「失業の防止」などのスローガンを掲げました。

当時は弾圧がきびしく、警官にさからったり、行進中にビラを配っただけでも検束されてしまいました。しかし翌年の第二回メーデー以後、開催地、参加者とも毎年増えていき、一九二五年の第六回メーデーではその年の三月に成立した治安維持法に反対するスローガンが掲げられました。

昭和に入り恐慌がおこると企業倒産が相つぎ、労働争議も激増しました。また三一年には満洲事変が勃発し、日本は戦争への道を進みはじめ、メーデーでのスローガンも「首切り反対」とともに「対支非干渉」などが掲げられました。

しかし、軍部や右翼の台頭、相いつぐ弾圧、労働運動の分裂などでしだいに低調となり、三六年の二・二六事件をきっかけにその年のメーデーは禁止され、以後十年間行なうことができませんでした。

戦後――家族も参加して

終戦後一九四六年、第十七回復活メーデーが人民広場（皇居前）で五十万人を集めて行なわれ「反動政権反対」などが決議されました。また同年五月十九日には食料メーデーがひらかれ、食料不足打開を訴える上奏文を天皇に提出しました。

一九五二年の第二十三回中央メーデーでは、デモ隊に対して警官隊がピストルや催涙弾を発射、死者二人、負傷者二千三百人という惨事になりました（血のメーデー）。五四年三月には第五福竜丸がアメリカの水爆実験で被爆し、その年のメーデーは「原水爆禁止」一色となって「再軍備反対」などを掲げ、全国六百カ所で行なわれました。

六〇年には「安保反対」が中心となりました。この頃から祭典の色彩が濃くなり、春闘の本格化とともに家族での参加も目立つようになりました。また、六〇年代は「ベトナム反戦」「沖縄反還」など政治色も強くなりました。

七〇年代は「公害反対」（七〇年）や狂乱物価に対する抗議（七三、七四年）、ロッキード事件に対する怒り（七六年）のプラカードが目立ち、その年の世相が反映しました。

昨年は「一兆円減税」「憲法改悪阻止」とともに「政治倫理の確立」などを求め、全国で三百九十万人が参加しました。

× ×

六十五年目で五十五回のメーデーというのは計算間違いではなく、昭和十一年にメーデーが禁止され十年間開かれなかったのです。

三池炭鉱の歴史の中から

智恩社参道

十六分会　武松輝男

その三 第三回

六公四民という高い年貢に苦しめられた農民。だから殻倉地帯といわれた筑後地方の農民たちですら、庄屋などといった一部の富豪を除いて、そのほとんどが屑米を食べた。

「いまのモンは、屑米のあン臭かにおいは知らんじゃろのう。それでン食べられるならまだよか」

祖父はことあるごとにそう言って、ご飯をこぼしてはならん、粗末にすると「ヒテグチに足がひっつく」、と諌めたものだ。

祖父の話によると、家族の病気などで小作をすることもできない者もいた。小作というのは家族全部で働かなくてはならないものなので、その家族のうちの主な働き手の誰かが欠けると、小作ができなくなる。それでも生きていくためには食べていかなくてはならないから、人間という仲間からはずれる、と言われた炭坑の間部になるほかはなかったのだという。

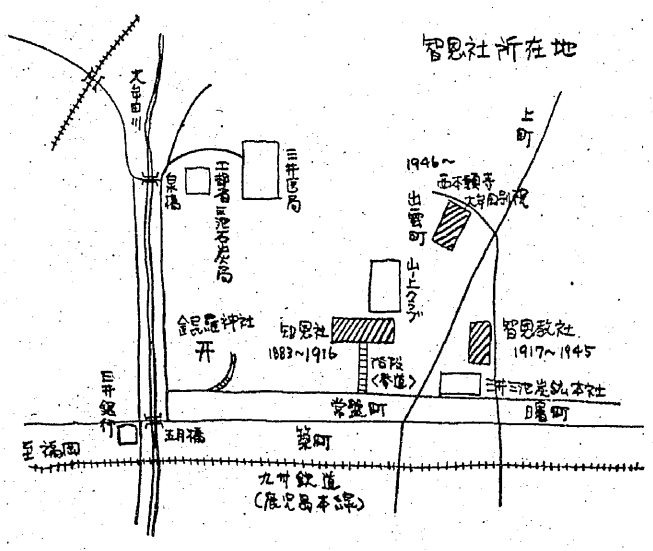
こういう、いわば農業からの棄民を雇い入れる三池炭鉱は、雇い入れてヤルからと、恩を着せることもできるし、賃金を割安にできる、また雇い入れてヤルことで反抗の芽も摘みとることもできた。これは三池炭鉱にとっては両面の利益とも言えるものであったが、その両面の利益も、西南戦争という社会の激変でもろくも崩れかかろうとするのである。

もし、雇い入れるときに得られた両面の利益が崩れるならば、坑夫掌握は大層困難さを増すことは目に見えている。しかも西南戦争で、百姓上りの鎮台兵が、世の中を支配し君臨していた士族、その中でも勇猛無双と言われた薩摩士族を打ち破ったのだから、それでどれほど勇気づけられたものか計り知れない。

西南戦争の風波がようやくおさまりかけた明治十六年十月、大浦坑で、再び囚人暴動が起きた。この時の暴動は、明治十四年の脱走事件と違って、坑内を焼き打ちするという、いわば囚徒の生死をかけたものであった。

結果的には囚徒坑夫二十四名、官民坑夫二十二名、坑内馬十三頭を坑内に残したまま密閉されてこの暴動は収まったが、この暴動を引きおこした囚徒は熊本県囚徒であった。この囚徒たちは、西南戦争で囚われの身となった者たちだといわれている。いわゆる思想犯で、燃えさかる坑内で従容として死亡したと語りつがれている。思想上相容れない明治政府に対して一念を貫くために、死をもって反逆をこころみたのである。

「今般有志者協謀醵金本年十月を期し智恩社説教場を当郡下里村字熊ノ上に建設し一層該社の隆盛を図るの企あり此挙旬も当鉱山従事の諸君に於ては公私両様に関し将来大に望を属すべきの美事にして生等固より賛成する処に有之候



は各一ケ月給額の十分の一より少なからざる金額を喜捨し基費用の幾分を稗補致度御同意の諸君は貴名の下に金額御記入御押印あらんことを乞う。明治十七年九月二日　小山篤」（三池夜話　藤村箴『三友新聞』）

神社仏閣というのは、広大な偉容を誇るか、それとも高い場所に建てた方が壮厳さがただよう。高い階段を登りながら、見上げる社寺は霊力を充満させているようであり、眼下は町並み睥睨しているようで、神仏の偉力を感じさせる。

いま常盤町から山ノ上クラブへは高い石段を登るが、その石段がかっての知恩社の参道であった。これからも三池炭鉱の意図を伺い知ることができる。

（カットも筆者）

北炭幌内から来組

きびしい現状打破へ

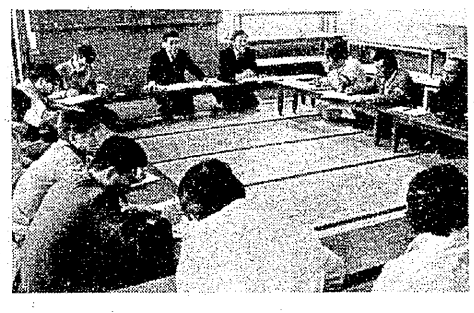
執行部、委員らと交流

四月二十日、北炭幌内からオルグが二人来組し、執行部と一番方、常一番の委員などと交流しました。オルグは幌内労組副委員長の保坂昭一さんと幌内職組書記長の富岡勝昭さんの二人。

幌内炭鉱は、昭和五十年十一月の大災害（ガス異常湧出→ガス爆発→坑内火災で二十四人死亡）発生以来、こんにちまで八年余に及ぶきびしい再建の道を歩んできましたが、その間労働者は大幅な労働条件の切り下げ（賃上げストップ、期末手当の大幅減額など）の犠牲に耐え苦闘を続けてきました。しかし、五十八年度の再建生産計画の大幅な未達成にともなう経営赤字のいっそうの累積と相まって、三月末の収支決算と重なり重大な危機に直面していました。

幌内再建の成否は、関連する真谷地・空地炭鉱をはじめ北炭グループ全体にも連鎖波及し、ひいては二千万トン体制を指向する石炭政策の崩壊に発展しかねない状況におかれています。

中・長期の計画は通産省の石鉱審で了承されたものの、会社側は幌内労組に対して、①操業日数の増加、②福利厚生費の負担増、③賃上げストップ、④期末手当の削減、⑤坑内労働不適格者の整理などの提案をしています。

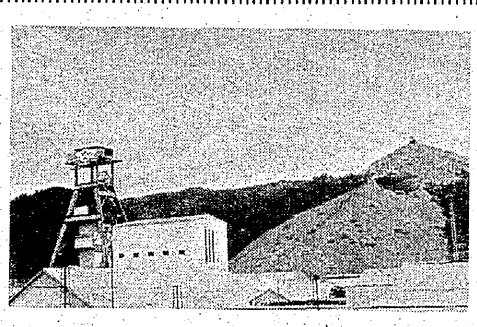


（組合事務所での交流）

このような情勢を受けて、炭労も過ぐる一〇五回大会で幌内再建闘争の推進を決め、具体的には対策委員会を設置し、幌内支部と真谷地・登川・空知支部は不退転の決意で取り組むとともに、炭労全体の協力体制のもとで、中央行動や共闘体制を強め、重要な段階では闘争方針を中央委員会あるいは大会に提起することにしています。

この日の交流では、幌内の状況がくわしく報告されましたが、「この状況を乗りきったとしても、将来の展望はどうか」「現在の労働条件は労働者として許容の限界を越えているのではないか」「組合員の声はどうか」などの質問が出され、真剣に意見が交されました。

なお、幌内オルグは三池での交流を終えたあと、翌日は高島労組との交流に向かいました。



北炭幌内炭鉱